

会議名	日本畜産学会第107回大会
開催日時	平成19年3月27日(火)～29日(木)
開催場所	麻布大学(神奈川県相模原市淵野辺1-17-71)
主催者	(社)日本畜産学会
参加人数(概数)	約1500名(推定)
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>優秀発表賞応募34課題を含む一般講演516課題の発表、3のシンポジウム、ワ 特別講演のほか関連学会研究会等会が11会場に分かれて行われた。一般講演の分野 別割合は、おおよそ栄養・飼養・飼料が23%、繁殖・生殖工学15%、形態・生理 約17%、育種・遺伝14%、畜産物利用が各19%、管理・環境3%で、首都圏開 催ということもあり、栄養・飼養・飼養、環境が減り、畜産物利用が多い傾向があっ た。(大会講演要旨集・畜産学会HP参照)</p> <p>報告者が出席したおよびシンポジウムおよび一般講演の中から、主として調査し た栄養・飼養・飼養と管理・環境分野の演題について報告する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大会企画シンポジウム「ルミナントバイオロジーの新展開」 <p>S I 「未来を切り微生物学」(座長 竹中 昭雄)</p> <p>S I - 1 難培養性微生物研究の展望： 大熊 誠也(理化学研)；シロアリについ ての培養を介さない微生物分子生物生態学的手法による演者の成果を中心とした ものであったが、遺伝子レベルの細胞機能の解明について多くの示唆に富むものであ った。飼料資源開発までの実用化についてまでを目指したこの分野の研究発展を期待 したい。</p> <p>S I - 2 新たな微生物資源としてのルーメンー真のゼロミッションをめざして ー：三森 真琴(畜草研)；地球資源問題についての現状解析が主であったが、いき なりバイオエタノールからの議論の展開にはいささか面食らった。別の目的からのも のとは思われるが、実用化には成功しなかったものが多かったとは言え、農水省の「第 1期バイオマス変換計画」プロジェクトによる低・未利用飼料資源の開発に関する研 究成果の忘却には時間が早すぎよう。</p> <p>S II 「人と牛と環境の共生を目指したエコルムノロジー」(座長 佐藤 秀介)</p> <p>S II - 1 牛に優しい飼育管理技術とはー家畜行動学の視点からー 植竹 勝治： (麻布大)；この問題についてのフロアーの反応の低さが気になった。アニマルウェ ルフェア問題についての畜産関連研究者・技術者に対する更なる啓蒙活動が必要と思 われた。</p> <p>S II - 2 飼料および畜産物生産における環境影響評価 築城 幹典：(畜草研)；L C A手法による種々の事例における環境影響評価についての報告であったが、入力す るインベントリーの数値によっては結論が大きく変わるので、前提条件を変えての評 価も必要と感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学術会議畜産学分科会主催公開シンポジウムは「畜産分野での食育」ー畜産に関 わる人々が「食育」へどのように対応すればよいかー：食育を現場において指導的立

	<p>場で推進している外部有識者を講師として招き、学会員を啓蒙する目的で企画されたものようであるが、時間的なこともあり、会員の集まりはやや少なかった。演題と講演者は</p> <p>生産と消費者を結ぶ取り組み 青木 隆夫（農産物販路開拓コンサルタント） 学校給食への取り組み 生産サイドから 関谷 敏彦（神奈川県畜セ） 学校給食への取り組み 給食提供側から 大井 桂子（綾瀬市学校給食課 学校栄養主査） 消費者の食に関する情報の要望 阿南 久（コープとうきょう理事）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般講演・優秀発表賞課題 ・食品残渣を活用したリキッドフィーディング（対象は豚）について、数課題報告された。農水省の発酵リキッドフィーディングのプロジェクト研究成果と日大の食品残渣の研究成果は、食品リサイクルが脚光を浴びている現在誠に時宜を得たものとして評価さる。 ・乳牛の飼養管理に関し、国公立機関の共同・協定研究、自動搾乳システムを活用した根釧農試の研究、哺乳ロボットを用いた改良センター牧場の研究報告があった。我が国の厳しい酪農情勢の下で、地味ではあるが心強い援軍といえる。 ・飼料機能性関連の数課題が報告された中で畜草研の遺伝子レベルまで掘り下げた研究は、いわゆるニュートリジェノミクスとして今後の栄養生理分野で活用されるべき研究手法として期待される。 ・鹿の栄養生理について北大、明大から捕獲した野生シカ、農工大からニホンシカについて報告された。同じ反芻動物でもシカは牛とはかなり様相が異なるようで、環境と食糧の両方面から注目されている中で更なるしこの分野の研究進展が期待される。 ・家畜福祉問題の基礎となる「家畜飼養管理の快適性」に関連する課題が管理・環境の分野に多数報告された。この問題の対応のためにもこれ等の国内研究勢力の活用と組織化が急務であろう。 ・飼養試験による肉質評価手法として重要な官能検査にも関連する「日本人の牛肉嗜好性に関する意識調査」の報告が、東京農大・日女大・宮崎大から2課題報告された。
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大会企画シンポジウム「ルミナントバイオロジーの新展開」、S I - 1 難培養性微生物研究の展望（大熊 誠也）から発展する分野。 ・高泌乳牛や哺乳期子牛の研究は実験サポートの面からも取り上げるのが難しい課題であるが、自動搾乳システム、哺乳ロボットの活用によってこの壁に穴を開けることができよう。
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当協会のこの事業により委託した課題の成果について、家畜改良セ・東京慈恵医大から「牛枝肉胸部における三次元CT画像の有用性」について報告され謝辞も述べられた。そのほか委託の前提となる課題の報告、委託課題が発展したものと看做される報告もあった。

4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<ul style="list-style-type: none"> ・この大会に報告された課題の大半は、この事業による公募研究開発課題の対象課題に含まれる。現在の公募方式では、応募数と採択数の関係から、双方にとってかなりの無駄があると考えられ、課題を提示しての募集に変換すべきと考えられる。この大会講演要旨が、その場合に提示する分野・課題の選定の参考となろう。
5. 会議の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の競争的資金事業の成果報告が年度末まで厳格に求められていることもあり、研究機関の企画や行政に関係している会員の大会参加が困難になっているように感じられ、情報の交流の点から問題である。年度末の大会開催が大学関係者にとって最も都合が良いわけであるから、この問題解決のためにも学校の9月新年度が必要か。 ・日本人以外の発表も多くなってきているが、日本語を話せるのに口頭発表・講演要旨ともに英語というのは如何なものだろうか。
報告書	針生 程吉